

# 法隆寺昭和資材帳関連の調査

平城宮跡発掘調査部・歴史研究室

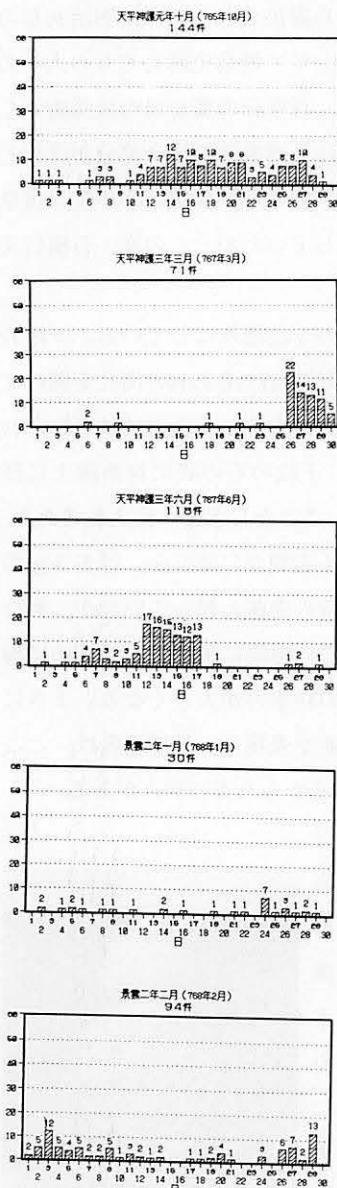


図1a 月ごとの製作数

考古第一調査室は、歴史研究室などと共同で1982年から法隆寺藏百萬塔の調査にあたり、1985年からはそのデータベース（D・B）化にとり組んできた。百萬塔は周知のように、相輪部と塔身部から成り、D・B化したのは塔身部のデータである。データ量の増加によってパソコンから使用機種を汎用コンピューターに変更、これを機に塔身部のデータを5200基に増やすとともに、相輪部500基分のD・B化も行った。この結果、百萬塔暦日の検討が可能になった。百萬塔の暦日は、賃金の基礎にするため工人が日々記入したのであり、これによって当時の暦の一部が復原できるし、百萬塔工房の運営形態も復原できよう。

1) 奈良時代の暦は、月の満ち欠けを太陽により補正した太陽太陰暦をもとに月の大小（29・30日）を決めたが、元旦は日食を避ける禁忌などから変更があり、また天体の運行と暦が大幅にズレると閏月により補正するなど複雑であった。それでも当時の暦があれば問題はないが、それは『正倉院文書』などに一部が伝わるほか、明かでない。

一方、この時代の歴史を記す『統日本紀』は、日附を干支表記する。これは暦日表記した日附史料を、編纂の段階に干支に換算して表記したもので、換算の誤りという問題がある。そこで、以上の史料とともに天文的な計算によって暦の復原をしている。これを推算暦という。今日、内田正男『日本暦日原典』（雄山閣1975）が精密であるが、細部では同時代史料との照合補訂が必要である。

百萬塔の暦日は、百萬塔の製作期間（天平神護元・765年から宝亀元・770年の5年余）に限られ、さらに、法隆寺に分置した百萬塔自体、当初の製作数百万基の一割という制約のためか、暦日に偏りがある。このため、数が比較的まとまった月を選び、推算暦と比較した。図1では各月の製作数を日ごとに示した。

百萬塔の暦日と推算暦とは、天平神護3年3月（大）、神護景雲2年2月（大）、同6月（大）のように一致する例と、神護景雲2年3月、同4月のごとく月の大小が推算暦とは逆の例がある。前者は推算暦の正しさを意味するが、後者は問題がある。

検討の結果、百萬塔の暦日が正しく、景雲2年3月は大の月、同4月は小の月とすべき、との結論に達した。『正倉院文書』などの史料もこの結論を支持している<sup>1</sup>。新訂増補国史大系本など現行の『続日本紀』は、干支の日附に算用数字の日にちの傍書がある。これは、江戸時代の刊本以来のものであり、上の検討結果に即すと、神護景雲2年4月条にみる三条の記事は、各々、戊寅を4日、乙酉を11日、辛丑を27日に訂正する必要があろう。

2) 官営工房は、奈良時代の生産関係で重要な役割を担ったが、その実態は史料不足から、なお審びらかにしがたい。ここでは百萬塔の暦日から、その工房の運営形態—特に休日のあり方を検討した。

まず、年末年始の休みはどうか。暦日を検討すると、年末は12月28日例（天平神護3年）が最も遅く、年始は1月2日例（神護景雲二年）が最も早い。今日でも仕事の遅れを取り戻す休日出勤は普通だから、特殊例とも見なせるが、当時のロクロは、動力として工人と同数の綱曳き夫を要し、少数の工人の意志では処し得ない。つまり工房はいつでも操業できる状態にあり、年末年始の休業は、あっても3・4日程度と思う。

通常の月はどうか。百萬塔の暦日から年月を捨象し、毎日の生産量を示すグラフを作成した（図2）。これでは、月の始めと終わりにピークがあり、月半ばに逆のピークがある。ことに、7日と22日前後の落込は大きい。しかし、月全体を通じて生産は途切れない。この事実は、上記の日が工人の多くにとって「定休日」だったこと、けれど、工房は休みなく操業したこと、を示すのであろう。（金子裕之）

1 金子裕之「神護景雲二年三月は大の月か小の月か」

『伊河留我』8号 1988

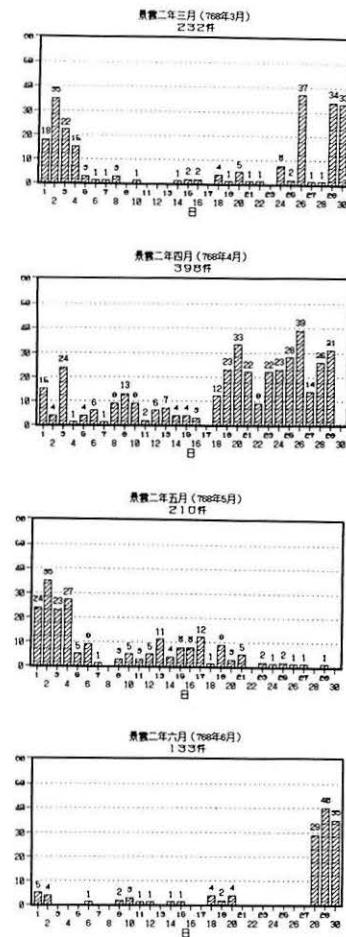


図1b 月ごとの製作数

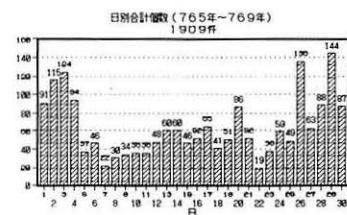


図2 日ごとの製作数